

神奈川県立鎌倉養護学校における学校運営協議会開催結果

本校の学校運営協議会を下記のとおり開催した。

審議会等名称	令和3年度 神奈川県立鎌倉養護学校第3回運営協議会		
開催日時	令和4年 2月17日(木) 午後1時00分～午後2時30分		
開催場所	会議室		
出席者	委員：7名 事務局：6名		
次回開催予定日	未定		
問い合わせ先	神奈川県立鎌倉養護学校 副校長 佐藤 浩栄 電話番号 0467-45-1951 ファックス番号 0467-43-4808		
下欄に掲載するもの	議事録	議事概要とした理由	
審議(会議)経過	<p>1 学校長挨拶</p> <p>2 学校運営に関するアンケート結果について(副校長より)</p> <p>【質疑応答】</p> <p>Aさん：学校全体のまとめになっているが、学部ごとの集計はどうか。学部ごとの違いは何か見えているか。言葉遣いなどについては、知的障害教育部門の方が多くみられるのか。</p> <p>Bさん：知的障害教育部門の生徒は、学校での出来事を保護者に話すこともあり、アンケートにあがりやすいかもしれない。保護者向けのアンケートとはいえ、子どもに聞いて答える親も多いと思われる。高等部の保護者は親が答えているものかどうか悩むこともある。</p> <p>A総括教諭：生徒は教員の言葉の指示によって動くことが多いので、言葉遣いについて感じることは多いと思われる。アンケートの結果については、真摯に受け止めていく。</p> <p>校長：「学校を楽しんでいるか」の設問について昨年は96%だった。今年度は100%を目指していたが結果的にダウンしてしまった。来年度も引き続き継続していく。</p> <p>Cさん：理由を記入できる欄は設けているか。</p> <p>副校長：無記名のアンケートということがあり、記入欄は設けてはいないが、答える方としては欄があった方がよいのか。</p> <p>Dさん：どこがマイナスだと感じたのか、具体的な内容を記入する欄があれば書いてくれるようになるかもしれない。</p> <p>Eさん：子どもたちや保護者に丁寧に向き合っていることがわかる。「何が」否定的だったのか、次につなげるためにもそれがわかったほうがよいのではないかと。無記名でかまわないので。</p> <p>副校長：回収は学部ごとによって回収している。</p> <p>Fさん：「人権が尊重された授業づくりのためのチェックリスト」を見ると、「日ごろ教員同士のコミュニケーションがとれている」の項目の評価が低い。なかなか改善できていないように感じる。教員の言葉遣い、あいさつ、態度などが先生</p>		

の間で指摘というか、言い合えるような関係、そういうことを話し合える場がないのでは。そういうところが保護者に見えているのかもしれない。

副校長：あいさつ、言葉遣いなどの項目では、保護者は97%、教員は99%が肯定的。自分ではできていると思っても、まわりからはそうは見えていないというところに、教員は気付く必要があり謙虚さが求められている。

3 学校評価の校内評価について（副校長より）

教育課程学習指導①

【質疑応答】

B総括教諭：「自立活動の指導目標・指導内容シート」については、他県からの転校生の実態把握で使用されていたものを参考にしている。今年度は研究授業に位置付け、子どもたちの実態把握にしっかり取り組むようにした。個別教育計画をすでに作成しているところから、改めて自立活動シートを作成するのは大変である。どの項目、区分を指導目標に入れるのか迷うこともある。形を先に作ってしまうと難しくなる。例えば新学習指導要領において肢体不自由教育部門の子どもたちで分けると、どの児童生徒もはじめ(1)に該当してしまう。実態は同じではないはずなのにそのようになってしまう。肢体不自由教育部門と知的障害教育部門が並置されているため、なかなか難しい。

教育課程学習指導②

質問・意見なし

生徒指導・支援①

【質疑応答】

Gさん：支援だよりを読んで、情報も多く保護者へ開かれていることを感じる。相談への電話番号は書かれているが、メールなど時間を限定されない方法があるとより相談しやすくなる。「こんな相談を受けたよ」というリストなどがあるとわかりやすいかもしれない。「相談してください」と言われても「何を」相談していいのか、それすら思いつかない場合もある。相談される側は受け入れの準備があるとは思うが。

C総括教諭：今年度の支援だよりはわかりやすさを心がけ、発行数も多い。保護者向けの支援だよりとは別に、教員向けのおたよりも発行しており、これには教員が支援・進路についてわかってもらう目的もある。相談リストについては、その内容が特定されないように考えていきたい。保護者にとって一番相談しやすいのは担任。担任から支援に「保護者からこういう相談があがっています。こういうことに悩んでいます。」とつなげられることが大事かと思う。

副校長：支援担当が行っている業務内容について、担任が説明できないことで止まってしまうことも考えられる。担任から「こっち（相談担当）に投げかけるといいよ」というやりとりができるようになるとうい。

D総括教諭：保護者との顔の見える関係づくりとして、コロナ禍で開催できなかった「茶話会」を来年度復活させていく。来年度の茶話会は、進路は年2回、相談は年3回を計画している。

生徒指導・支援②

質問・意見なし

進路指導・支援①

【質疑応答】

Hさん：学部ごとの共有についてのところは、小学部は学部長が報告、中学部は回覧となっているが、回覧では伝わりにくいのではないかな。

副校長：進路懇談会での内容が、担任まで伝わっていない。

Iさん：今年うまくいかなかった、ということか。

副校長：進路懇談会には進路専任と学部長も参加はしているが、学部の担任には進路専任から説明したほうがわかりやすいと考える。

Jさん：進路先も多様化している。移行事業所も多くなり、保護者との情報共有が必要である。小学部、中学部の保護者も教員も情報共有を密にし、進路先を見つけて選択していくためにも、小さいうちから情報を仕入れていくことは重要である。

Kさん：進路に関する研修というのは、他校ではどのように行っているのか。

副校長：外部の方を呼んで学習会をしている。

Lさん：肢体不自由児向けの生活介護事業所も新しいところできていて、活動内容も今風になっていると感じる。知的障害教育部門の進路先では、卒業後に本人と合わなくて続かなかったということも聞いたことがある。進路先の場所がどういうところなのか、情報はほしい。

進路指導・支援②

質問・意見なし

地域等との協働①

質問・意見なし

地域との協働②

【質疑応答】

D総括教諭：地域連携係が「マップ」を作成した。いわゆる「地図」ではない。クリックすると地域とどんなかわりをしていたのかの活動内容が出てきて、教員には使いやすくなっている。今までは近くのコンビニに買い物に行って店員さんとやり取りしたり、散歩しながら声をかけたりできていたが、コロナ禍でできなくなっている。今後、地図上にどれをどの程度組み込んでいくのか検討していく。

Mさん：中学部で取り組んだフラワーアレンジメントなど、地域の資源を利用していたとは、知らなかった。連絡帳に「地域の方々」と記載されていたが、その方が「どういう方々なのか」「こういう人たちとかわった」という説明があるとわかりやすい。いろいろつながりはあるものの、それが保護者に伝わらないのはもったいない。

学校管理・学校運営①②③

【質疑応答】

副校長：学校は、火災時には、防火扉が閉まるようになっているため、廊下を通らず外に逃げるしかない。

まとめ（全体を通して）

Nさん：地域としては、養護学校のことを地域の方が知っていくことで仲良くなっていき、助けてあげようという気持ちが起こる。学校が地域をどう使うか、地域が学校をどう使うか。以前にサッカーの団体が養護学校を使えるようになったときがあり、その貸し借りからいい関係が作れるようになった。地域の中にはいろいろな会があって、協力し合うことができる。それは学校にとっても地域にとってもメリットがある。

Oさん：相手に話がうまく伝わっていないことがある。謙虚さが大事。できていることもできていないととらえられることもある。教員間の情報共有は時間的な制約もある中でむずかしいこともあるが、顔の見える関係を意識する中で地域も学校の中もより近くなっていくといい。それがいい学校、いい社会につながっていく。

Pさん：地域とかかわる中で障害のある子の理解が深まる。「支援を必要とする子」は「できないことが多い」等、一般的にはマイナスのイメージが多い。ひとりひとりできることがあることを、地域の中で理解してもらうために、地域の中で連携をとることが必要である。意思決定支援を学校のカリキュラムの中に位置づけて推進して行ってほしい。「自分はこういう風に生きていきたいんだ」という思いを、子ども自身が持てるような教育に学校全体で取り組んで行ってほしい。

Qさん：いろいろな目標に取り組まれ先生方は大変であるが、若い力を活用して教員側の風土が変わっていくとよい。年配は腰が重いところがあるので、若い力のいろいろな取り組みや意見を取り入れるとスピーディに行くこともある。それは奇抜なアイデアも含めて。今の若い世代はZ世代と言われており、スマホを使い慣れている。計り知れないアイデアを持っているので、それを活用していくとよい。

Rさん：丁寧な分析をされている。職員も多いし、いろいろなことをしていく中でわからない、困ったということも多いだろう。そういう時に地域に発信すると誰かが教えてくれることもある。

Sさん：PTA活動をしていると先生たちと話す機会も多く、フランクに話すこともでき相談もしやすい。親から先生への相談だけではなく、先生からも親にもっと話しかけてもよいのでは。「お母さん、どう思います？」というような、先生からのアプローチもよい。親は地元出身である場合もあり、ここで生まれ育った親たちが地域とつながっていることも多い。また、鎌養だけではない親同士のつながりによって「そういうのを知っていますよ」という広がりもあるかもしれない。親からの相談を待つだけではなく、先生からも投げかけてほしい。

Tさん：保護者と先生はお互いに遠慮しているところがあるかもしれない。保護者に

言われないから動かない、ということも教員にはある。親からの要望に、先生が「こうすればよくなる」と応えてくれることが多いが、先生から「こういうことに困っていませんか」という働きかけをしてくれると親が考えるきっかけになるかもしれない。

4 不祥事ゼロプログラムについて
報告

5 来年度の学校運営協議会と各部会の在り方について

副校長：来年度も部会は継続していきます。学校運営協議会委員の任期は2年で、今年度は2年目になるが、この計画自体は4年計画で一区切りである。今と同じメンバーで引き続きお願いしたい。記録については、HP に載せさせていただく。

6 学校長挨拶